

小机城を明らかに

＝ 令和4年度小机城跡埋蔵文化財試掘調査現場説明会＝

1. 調査の目的

昭和38年（1963）、いわゆる第三京浜道路の建設で、縄張（なわばり、城の範囲）の一部が発見されました。文化財保護法による埋蔵文化財保護制度は既にありましたが、戦後の高度経済成長の背景もあり、十分な調査がなされることはありませんでした。

市教育委員会では、この小机城跡について、より良い保護（保存と活用）方法を検討し、未来に継承するため、保存目的の各種調査を検討しており、今回はその第一歩として、小机城跡の実態に迫るための発掘調査を実施することとしました。

2. 調査概要

調査名称：小机城跡埋蔵文化財試掘調査

所在地：横浜市港北区小机町737番

調査期間：令和5年1月10日（火）～2月28日（火）

調査面積：約36.0㎡

調査主体：横浜市教育委員会

調査支援：公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター



図1 調査地点位置図

西曲輪は現在の本丸広場にあたり、標高は約38mになります。調査地点は西曲輪の周縁に沿うように北調査区(7×1m、図1-①)・西調査区(4×1m、図1-②)・南調査区(3×3m、図1-③)・東調査区(7×2m、図1-④)の4地点を設定しました。

3. 西曲輪北調査区



西曲輪北調査区全景(西から撮影)

西曲輪北調査区については現在の本丸広場北側にあたります(図1-①)。調査区は北調査区の西辺が、令和3年度に調査した北空堀調査区(図1-⑤)の西辺と同一線上になるように配置しました。

人力により掘削したところ、地表面から約2.3m下で関東ローム層を検出し、調査区北端付近から北空堀へと落ち込んでいることが確認できました。その傾きは約37°をはかり、令和3年度に調査した北空堀調査区の斜度と概ね整合します。

また、ローム層上層にある黒色土層はつき固めたように固く、層の中からはかわらけなどが出土しています。



西曲輪北調査区北端東壁拡大(西から撮影)

4. 西曲輪西調査区



西曲輪西調査区全景写真(北から撮影)

西曲輪西調査区(図1-②)は現在の本丸広場西側にあたり、さらに西側には第三京浜道路が南北に走っています。

人力により表土を掘削したところ、調査区の西半分より関東ローム層まで掘り込まれた痕跡がみつけられました(上写真右が西)。この掘り込みについては、第三京浜道路開削工事直後の昭和39・40年(1964・65)に学習院大学輔仁会によって発掘された調査区の一部である可能性が高いと考えられます。

5. 西曲輪南調査区

西曲輪南調査区は現在の本丸広場の南側にあたり、一辺3mの正方形の調査区を現在の土塁斜面にかかるように設定し、調査中に一部を北側へ2m拡張しました(図1-③)。

調査区南側の高まりから掘削したところ、地表面から約1.6m下で関東ローム層を確認しました。

このローム層の上面を精査したところ、調査区南東部に一辺約1.5mの隅丸方形の遺構がみつけられました。東壁際を掘削したところ、深さが約40cmになります。

また、調査区北東隅から南西隅にかけて、径20cm前後の小穴が見ついています。北側に拡張した調査区際からローム層の検出面が低くなり、その付近からは土坑が検出されました。土坑の中からは中世のかわらけの破片が出土しました。



西曲輪南調査区全景写真(北から撮影)

6. 西曲輪東調査区



西曲輪東調査区全景写真(東から撮影)

西曲輪東調査区は現在の本丸広場から東側にあたり、調査区は南側の斜面から北側の平坦面にかけて長軸7mの調査区を設定しました(図1-④)。

調査区南側の高まりから掘削したところ、地表面から約1m下で関東ローム層を検出しました。この上面を精査したところ、斜面部分を東西に横切る遺構がみつかりました。

また、調査区南側の斜面から北側の平坦面にかけて精査したところ、斜面際からローム層を大きくえぐる谷のような落ち込みが北東の方向に広がることを確認されました。

そして、堆積する土の中からは中世のかわらけなどが多量に出土しました。

東調査区一帯については「武蔵北条三郎居城」(浅野文庫『諸国古城之図』)によると、西曲輪が張り出しており、谷のような落ち込みはみられないことから、北条氏が小机城をおさめた時期には埋め立てられていた可能性が考えられます。



西曲輪東調査区深掘部断面(北東から撮影)

小机城を明らかに — 令和4年度小机城跡埋蔵文化財試掘調査現場説明会 —

発行日 : 令和5年2月11日

発行 : 横浜市教育委員会

編集 : 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター